

和辻哲郎の哀愁

辻 憲男（文学部教授）

久しぶりに帰省して、父と話した。「お前の今やっていることは道のため
にどれだけ役に立つのだ、頹廢した世道人心を救うのにどれだけ貢献する
ことができるのだ」。返事ができなかった。父は「医は仁術なり」を標榜実践
する村医者、自分は「放蕩者のように、美術の享楽に向かって急いでいる」。
五月雨の中、哀愁が胸を閉ざした。その心持ちで、奈良から斑鳩へ古美術
を見てまわった。旅の終わりは中宮寺の、あの黒いつやの肌の「聖女」であ
る。かつてこの寺に来た時、自分の連れていた子供に尼さんが「お嬢ちゃま、
観音さまはほんとうにまっ黒々でいらっしゃいますねえ」と言った。十八九
の色白い、感じのこまやかな人であった。この日はその姿が見えなかった
(和辻哲郎『古寺巡礼』1919年)。

「幼稚な印象記」だから、初版以後何度か書き直そうと思った。が、幼稚
さは「若い情熱」と不可分だと知った。それでも戦後の改訂版では、巡礼者
の感傷や空想をおおかた削り落としてしまった。

和辻の19歳の時の創作「菜の花物語」は、ある男の純愛物語。大阪で博
覧会があった年、西宮の叔母の家で、可憐な「桂ちゃん」と知り合った。二
人は将来を誓う仲になったが、彼が腸チフスで入院している間に、彼女は死
んでしまったという。ところがこの春、彼は奈良でそっくりの女性に出会っ
た。どうやら親たちの計略で、娘を隠していたものらしい、云々。…ロマン
スの実否は定かでない。最晩年の著作『自叙伝の試み』を見ても、ただ博覧
会见物の感想が記されているのみ。



姫路市仁豊野(にぶの)にある生家。和辻家は
太子町斑鳩や加古川の鶴林寺にも縁があった。